

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日開始發行
平成二十四年九月一日發行
第百十五卷第九號

ホトトギス

九月号



俳句随想 〔三百六十三〕

汀子

父年尾の病が小康を得た頃、私は父の補助として朝日俳壇に毎週通つて、病院へ選句用の葉書を届ける役目をしていた。選者は誓子、草田男、楸邨という方々に交じつて私も予選考に当つた。その時、草田男さんに俳句について色々とお教えを賜つた。印象深いことで一つ、「木の芽の積もりで『芽木』と使っている人がいるが『芽木』という木はありませんよ。これは明らかに間違いで私はこのように使つて来る俳句は選びません」と何度も言われた。『木の芽』は三字、『芽木』は二字で使い易い。確かに言われるのは正しい、と思つて気をつけている。

『聖五月』は五月がカトリックでは聖マリアの月となつてゐる。それらを踏まえて使うのはいいが、何でも『聖五月』と付けるのは頂けない。

夏の季題になつてゐる『青鷺』と同じように『白鷺』を季題として使つてゐる人が居るが、白鷺は年中いるので季題にはしてゐないのである。季題に設定された経緯があり、季節の言葉ならば何でもいいのかではない。では新季題はどのようなにして生まれるのか。という疑問が寄せられる。☆季節がはつきりしていても例句がない。☆言葉が長すぎて俳句の季題には相応しくないなどが理由になる。先回三十の新季題が生れた事も知つて欲しい。

旬日記 汀子

平成十三年九月二日 芹屋ホトギス会

台風を押しつけて来られし会となる

すぐ眠くなる夜業とはいへざりし

雑草のやうに秋草伸びてをり

九月四日 下朗句会

人想び人なつかしみ秋灯

刈萱の雨の名残を活けられし

大事終へしみみ点す秋灯

台風の中日帰りの空の旅

九月五日 ロイヤル俳壇

かけがへのなき避遍も風の盆

雨止んで月の出会ひとなりしこと

雲間より光を得つつ五日月

嵐呼ぶ雨呼ぶ一と日男郎花

秋灯にホテル一階模様替

九月八日 清交社

雨雲を切り離しゆく鱗雲

風渡る名草もるともねこじやらし

たちまちに雨後の木蔭の秋の蚊に

油断してをりしを知られ秋の蚊に

快晴といふほかはなし鱗雲

秋の蚊の所在ありつつ見失ふ

九月九日 工業倶楽部

道ありて道なき如く花野ゆく

踏み入りて花野の色に紛れけり

初月夜より夜々重ね行くべかり

九月十日 日本伝統俳句協会全国俳句大会

佇めば露けき過去を甦る

表情の皆にこやかに爽やかに

九月十三日 大阪倶楽部

露の阿蘇旅路はるけくありしかな

はるかより見て秋草の紛れたる

この景色秋草一つづつ懐古

噴煙の吹かれ露けき草千里

初月のそれより夜々をかぞへ来て

九月十三日 綿業倶楽部

どこまでも靡く芒の阿蘇の景

虫の音を聞きとめしより旅心

見し景の阿蘇の芒に或る回顧

根子岳の稜線峨々と露けしや

九月十五日 祝「浮葉」四百号

爽やかに重ねし月日たふとしと

九月十七日 句会と講演の会

花舗に立ち寄りて子規忌の供華を選る

蘭咲かせつづけ三十三回忌

秋草を活けて舞台の出来上る

合流す子規の墓参を終へしより

九月二十日 有恒俳句会

男郎花雨にうなだれはじめけり

会場を替はる初心の露けしや

雨予報二十三夜の今宵とて

何回忌ともなく聴きぬ鉦叩

胸ぬちを走る露けき思ひかな

幾夜経し雨とて二十三夜かな

目の前に在せし露の思ひ出も

九月二十日 無名会

萩括りてもくくりても地を這へる

萩芒風雨の中に吹き荒るる

台風の進路に油断なかりけり

六甲の萩芒とて供華に剪る

颱風の進路の中に旅一つ

九月二十一日 夏潮句会

藤袴愛でて天寿を全うす

台風を怖れぬ人の集ふ会

台風を抜ける頃とて句に集ふ

欠席の電話の二三台風に

藤袴文庫と名づけ花を愛で

九月二十二日 さくらぎ会

快晴の朝を残して野分去る

藤袴咲きはじめとも終りとも

木星を従へしよりいざよへる

九月二十六日 アサヒカルチャー俳句会

ふとしのぎ易き朝とも九月尽

爽やかに迫はるる予定ありしこと

九月二十九日 悼 田原憲治様

秋の虹消えて思ひ出残りたる

九月三十日 時雨句会

つづけ来し夜学三百回を祝ぐ

いざよひの更けて所在の高かりし

露草を埋め一面に風渡る

風渡る十六夜の空刻みつ

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十三年九月一日 夢二忌全国俳句大会

霧も又忌日彩るものとして

九月三日 芦屋ホトギス会

夜業せり総理と同じ日に生れ
夜業の灯消して銀座のネオンへと
秋草に忌日の卓といふ気品

九月四日 野分会芦屋例会

露けしや首相と同一年の僕
日本に二百十日といふ節目
露の身を今日もアルコールで飛ばす
その中の露一粒にある憂ひ

九月五日 カトリック新聞選者吟

蝸や畳敷きなる小聖堂

九月八日 土筆会

稗減りてより日本の目覚めゆく
芋莖干す平家の裔といふ漢

九月九日 六甲会

秋蚊には好かれ君には振られたる
秋の蚊を叩く眼を吊り上げて
秋の蚊の大胆不敵なる羽音

九月九日 虚子記念文学館投句

秋の蚊を連れて新幹線の旅

九月九日 遇会

偲ぶ人多き九月でありにけり
偲ぶとは酌み交すこと夕月夜
九月十一日 日本伝統俳句協会全国俳句大会
火の山といふ爽やかな傾斜かな

崖下りる松虫草と出会ふまで

九月十二日 朝日カルチャー若草句会

撫子や集まつてゐて淋しくて
月明にビル戦いてをりにけり
人類の足跡残し月出づる

輪郭に月の表情ありにけり

撫子の満開といふ句会かな

颯の山気に濡れてゆく音色

九月十三日 百夜句会

何時の世も恋路は遠し西鶴忌
金色の星銀色の虫の声

九月十五日 登高会

二三輪コスモス風になり切れず
揺るるには非ず舞ひ初む秋桜
残されし唐黍吾子の齒形つけ
秋の夜の肥後に君との余情かな
唐黍を焼く薄口の香を広げ

九月十七日 ホトギス社句会

蘭咲かせ逝きたる父の歳も超え
蠡蝨ぎいで途切れてしまひけり
子規虚子の手紙を爽やかに説かれ

九月二十日 草木瓜会

収穫を終へし稲城の屋の虫
虫時雨都心の伽として淡し
不夜城を遠くに置いて虫時雨

日曜も敬老の日も仕事かな

八十路とて敬老の日を嫌ふ母

都心にも闇の戻りて虫時雨

九月二十一日 蕉心会

大雨に暴風に秋深まれり

水澄んで三角池は何も居ず
雲連れて雲押し退けて颯風来

颯風のこれからといふ静寂かな

咲くものの戦いてゐる颯風裡

颯風はやつぱり外で感じなきや

大雨を溜めて蕉庵水澄めり

颯風の中集まれる勇者達

忌心に叶ふ赤さや曼珠沙華

九月二十五日 野分会東京例会

水割りの氷露けく溶けゆけり
街宣車世の終り解く厄日かな
オルガンの音色露けきレクイエム

九月二十七日 若水句会

月白に都心の舞台整へり
都市といふ脆き生活や野分後
太刀魚の光歪めて釣られけり
嵐去り月をぼつんと置いてゆく

九月二十八日 目黒学園句会

日溜りに伸び切つてゐるあなまどひ
真葛原風の存問受けてより
虫時雨とは木星を近付けて
穴まどひ居さうな風の匂ひかな

葛の葉を風が彩る静寂かな

九月三十日 時雨会三百回記念句会

露草に染め上げられてゆく未来
露草の色太陽に溶け出しぬ
夜学して東大目指さざる息子

露草に色あるものの従へり

寄宿より戻りて夜学子となれり

もう迷ふことなき道を行く夜学

雑詠

廣太郎 選

一面に起伏は無意味花菜畑 香川 湯川 雅
 満開の花に饒舌なる視線 同
 風入れて花の懐ときめかす 同
 嘯や道に迷うてゐて樂し 神戸 山田佳乃
 凧揚げて一人一人に違ふ空 同
 春愁や角の揃はぬ千羽鶴 同
 花屑のこんなな遠く来て眠る 東京 今井肖子
 いつまでも風を見てゐる遅日かな 同
 遠足に降られしよりの雨男 同
 赤極めても明るさのチューリップ 榎原 稲岡 長
 岩伝ふ垂水とろりと春の昼 同
 振り返り思ふことあり昭和の日 同
 人待ちて風待ちちて青柳かな 東京 橋本くに彦
 山襲の紫けむるかかり藤 同
 松蝉の音域森をふくらませ 同
 花の宿料理の味は妻に似し 同
 弘前を素通り出来ぬ花の旅 同
 春眠や車内放送遠く聞き 同

なき翁を偲ぶ落花の句碑ほとり 京都 安原 葉
 差しそめし日に変幻の花の雲 同
 下りて来る日を待つ谷の朝桜 同
 じふぶんに桜を見しと言ふ男 東京 今井千鶴子
 葉桜に陰生まれつつ昼深し 同
 或る夕べ牡丹の花を雪が打つ 同
 花の忌の風のやうなる諷経かな 熊本 岩岡中正
 大いなる空が息してゐる虚子忌 同
 天上も天下もひとつ仏生会 同
 大楠の風を一新して若葉 奈良 古賀しづれ
 城といふ美学ありけり薫風裡 同
 海に浮き万緑に浮き街神戸 同
 来るとなくそばへ来てをり袋角 東京 田丸千種
 石庭や蟻の時間の過ぐるのみ 同
 あらあらとまくなぎ吹かれやすきかな 同
 松に載り石には消ゆる春の雪 相模原 木村享史
 松の雪鯉の頭へしづりたる 同
 田楽をかざし調詠論を説く 同
 初花といへる光の如きもの 神戸 木村淳一郎
 午後からの人が花人らしくなる 同
 筍の軽くなれない土の色 同
 春暁の黄蘗の幹の白み初む 同
 天界に在りて句碑守り花を守り 同
 一調を謡ひ納めし夕桜 同
 同 千原叡子

雑詠句評（八月号より）

くに彦・雅　・佳乃
比奈夫・さい雪・純也
公次・一步・仁義
しげ人・廣太郎

秋の日をころがし三遊間を抜く 大阪 蔦 三郎

青く澄みきった秋空の下でゲームは進み、九回の裏ツーアウト満塁からの一打であろうかと想像させられる。その転がって行く白球を「秋の日をころがし」と表現したことにより、スタンドの歓声までも良く伝わってくる。（くに彦）

プロならばデーゲームである。サードとショートの間を抜いて行ったクリーンヒットの情景が鮮やかに目の前に迫ってくる。この時期はベナントレースも終盤になって一層の盛り上がり、上位のチームは見せているであろう。是非我が阪神タイガースも毎年この盛り上がりに加わって欲しいものだ。（廣太郎）

蒜を吊りキャンティの瓶を吊り 柏 田丸千種

キャンティとは、イタリアのトスカーナ地方で産出する赤ワインのことだそう。蒜もイタリア料理には欠かせない。ちよつと気の効いたイタリアンレストランなんかには、蒜と薦で巻いたようなこのワインの瓶なんか、並べて吊つてあると、何とも本格的なお味が楽しめそうである。

素敵なデイナーの白い卓布の上に、赤ワインの入ったグラスが映える。またまた、このような、シチュエーションに作者はびつたり。おしゃれな一句。（雅）

未だ日本人が現在ほどワインを嗜まなかった頃、筆者の記憶する限りでは、イタリアワインといえはこの「キャンティ」であった。しかも種類は限られていて、蘘菔に包まれていたと思う。そんなレトロな雰囲気醸し出されていて、さりげなく季節が主役となっているところが憎い演出である。（廣太郎）
（以下略）

天地有情

子選

梅見客景に吸はれてゆきにけり 東京 稲畑廣太郎
青き踏む虚子生誕の日の句座へ 同
句碑三基揃ひし枳殻邸遅日 京都 安原 葉
閉門を遅らせてゐる園遅日 同
心にもともして遠き山火かな 熊本 岩岡中正
いそがねば花のこころに追ひつげ 同
見上げればもうそれだけで花下となる 神戸 後藤立夫
どこやらが晴れてゐるから花曇 同
生享けて九十年目日脚伸ぶ 徳島 上崎暮潮
卒寿春二十六本歯を残し 同
こぼれても仰向かぬなしえごの花 神戸 三村純也
雨ごとに庭新しき五月かな 同
花ミモザ空蒼ければ蒼きほど 芦屋 小杉伸一路
麗かや 臉閉ぢれば 日の光 同
日のさせば全山の花応ふなり 大阪 佐土井智津子
花惜む吉野へ人の来ては去る 同
白梅に立ちて傘寿の志 相模原 木村享史
田楽に酒は手酌がよかりけり 同

雨霧の奥に一瞬花吉野 樞原 稲岡 長
夕影をあつめて浮かぶ谷桜 同
焚いてさへぬれば忘れて春煖炬 神戸 長山あや
てのひらに雲のりさうな露台かな 同
一夜さといふ一瞬や花の宿 東京 山田閨子
花の宿夜の庭へとまたひとり 同
時を待つ深紅ひそめし牡丹の芽 吹田 宮崎 正
一日づつ卒寿へ歩みゐる五月 同
百草の声を野に聞く薬狩 箕面 井上浩一郎
牡丹を離れられざる蝶と居る 同
観潮船なりし咸臨丸と言ひ 神戸 後藤比奈夫
麦藁で吹きたる頃のしやぼん玉 同
連翹とたんぼの黄の今日同じ 熱海 嶋田摩耶子
同病の友は訪ひやす連翹咲く 同
犬もらひ抱いて帰りし子供の日 東京 今井千鶴子
寄せ植の苗それぞれの育ちやう 同
喚声は風のいたづら花筵 金沢 藤浦昭代
花筵たたみ星空近づけり 同

天地有情句評

汀子

一面に咲き満ちた桜の下の存在感。

卒寿春二十六本歯を残し徳島上崎暮潮

健康で長生き出来た喜び。

雨ごとに庭新しき五月かな神戸三村純也

一雨ごとに茂りが深くなる初夏に親しむ庭。

麗かや臉閉ぢれば日の光芦屋小杉伸一路

臉を閉じても明るい春への歓び。

日のさせば全山の花応ふなり大阪佐土井智子

快晴の明るさの中で咲き進む山桜への讃歌。(以下略)

虚子記念文学館の存在の意義。

青き踏む虚子生誕の日の句座へ東京稲畑廣太郎

句碑三基揃ひし枳殻邸遅日京都安原葉

句仏句碑の両側に建った虚子、碧梧桐の句碑への思い。

いそがねば花のところに追ひつけず熊本岩岡中正

今年の花の咲き様を知った作者。

見上げればもうそれだけで花下となる神戸後藤立夫